

結

絞首台の鐘が、からころ鳴っています。

「……………」

疑いあいが発生した時点で、きっと疑いが
禍根を残さない未来などなかったのです。

人間たちは傷付けあって、得るものは何一つありませんでした。
あなたはこの事件にかかわったすべてを憐れみます。

ただ巻き込まれた司祭／マキシア。
不意に隣人が肉だと知ってしまった行商／シュクル。
愛するものを知らず踏み込ませてしまった魔女／リタ。
人を望んだのに、獣へと踏み込もうとした新顔／ラウル。

「お前には同情はしないが。……もう、許されてもいいとも思うよ」
あなたはひっそりと村を眺めながら、ひとりごちます。

この村はいつか終わるのでしょうか。
それでも、あなたはこの場所にとどまります。
人に愛しさを見た、この場所の死を看取るために。

あなたは壊れてしまった日常に、
いつも通りの顔をして帰っていくのでした。

+++++

END-D-1：『正しさなどないとしても』